

## 怪我の功名



7月大谷翔平  
選手（以下大谷

選手）が右肘内側側副靭帯損傷から打者として復帰した。前田健太には抑えられたものの四球から二盗しチームの勝利に貢献した。投手、打者だけでなく走者でも非凡な才能を魅せてくれた。ただ今回は大谷選手の才能について語りたいたいのではない。故障したらしつかり休む重要性を大谷選手という実例から認識していただきたいと思う。

以前花巻東高等学校野球部監督佐々木洋氏の手記を拝読したことがある。花巻東高校野球部では入学前に検診を行って大谷選手の体には骨端線が多く残っていると把握されていた。過度な負担を掛けられないという認識の中、監督は肩、

姫路市医師会スポーツ医学委員会 高祖清泰

肘に負担がかからないよう注意されていた。ところが2年生6月の練習試合で大谷選手は肩肘ではなく股関節痛が生じ夏の県大会は出ず、甲子園では試合途中から登板するも本来の投球はできずに初戦で負けた。甲子園後坐骨結節の骨端線離解と診断されたようである。秋は投球と走塁は股関節痛が生じ、できず、打撃では痛みがでなかった。東北大会は代打での1打席のみでの起用、準決勝のみスタメンで起用された。療養中は強制的な睡眠時間の確保、食事の増量、運動量低下で体重はひと冬で20kg増えたものの、打撃練習しかできない期間で大谷選手の打撃力は著しく向上したと書かれている。佐々木氏は塞翁が馬と表現されているが大谷選手の二刀流はこの故障がなければなかったかもしれないと思うのである。勿論医療に理解のある佐々木氏のように優れた指導者がいることが必要条件である。